



十月に運動会がありました。その後、別日に全園児で「運動会っこ」をしました。異年齢の踊りをみんなで一緒に踊ったり、年少児が年中児と年長児のリレーの応援をしたりと、とっても盛り上がりました。

また、毎日の好きな遊びや季節ごとの行事では、異年齢の幼児同士が関わることで、楽しく過ごしています。同年齢の幼児とは別の関わり方を知る機会となり、貴重な時間となっています。



倉敷市立連島南幼稚園

なかよし週間の取組

倉敷市立連島南小学校 藤澤 伸治

七月に第一回なかよし週間がありました。このなかよし週間は学級児童が主体となり、自分の学級をどうしたいのかを決め、決定した「なかよし宣言」に取り組み始めていく期間です。

このなかよし宣言の話し合いで、大切にしていることは

- ①学級児童の全員が、こんな学級にしたいという考えと理由をもつこと
- ②他の児童の意見に、賛成や反対などの意見を伝えること
- ③単純な多数決で決定せず、意見と意見を合体したり、少数意見でもきくと取り扱ったりするなど折り合いをつけて、合意形成の上で決めること
- ④決まったことには、全員で取り組むこと

などです。どの学級も活発な話し合いが展開されました。そして全学級の宣言を一階の廊下に掲示し、意識の高揚を図りました。以下のような宣言が考えられました。

『みんなと声をかけあって 助け合える なかよしクラス』

『ふわふわ言葉がいっぱいで 助け合う』

『一人一人を思いやり、笑顔、感謝、行動に表す』

そして みんな HAPPY』

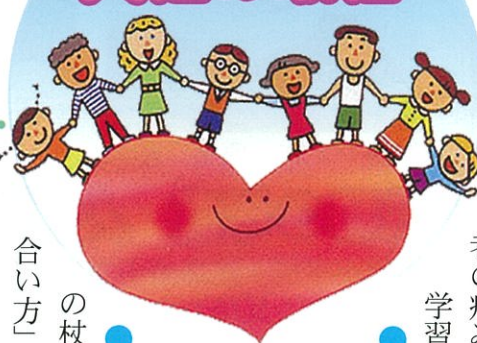
『いじめなし 思いやりをもって ふわふわ言葉をつかう』

学級の宣言を実現するために、目標を設定するだけでなくその目標を達成する行動の取組も同時に考えました。また、目標達成には、普段の言動や目標に対する振り返りが不可欠です。継続して取り組むことで、目標への達成度が見えてきます。

このなかよし週間で一番大事にしたいことは、「自分の学級を自分たちでよくしていく」という主体的な考え方です。学級の課題を自分たちで見つけだし、学級全体で共有し、改善策を考えていく実践力も高めていけたらいいなと考えています。

第二回なかよし週間では、今までの実践を振り返り、その時の学級課題に合った目標設定になっているか見直します。自分たちの思い描く学級に近づけるように年間を通して取組を続けていきます。

人権の取組



令和二年度 連島南中学校の取組について

倉敷市立連島南中学校 坪井 冬馬

●連島南中学校は、今年度人権学習「共生社会の実現をめざして」障がいのある人に関する学習を通して「〜」に取り組んでいる。昨年度はよりよい人間関係の基盤を作ることを目的として、「友達といえよかったな」と思うことができる人間関係づくりを重点をおいて取り組んだ。しかし、障がいのある人への理解が十分でなく、体の不自由な生徒に対する暴言や差別的な発言から、トラブルになることがある。このようことから、身の回りにおけるバリアフリーや障がい者理解だけでなく生徒が共生社会を形成するために必要な人権感覚を正しく身につけ、他者の痛みや感情を共感的に受容できる生徒の育成をめざして人権学習に取り組んでいる。

●「生徒のそばに立つ」を指導の中心において、どの生徒にもいじめは起こりうることを認識して教育活動にあたっている。また、定期的ないじめアンケートの実施を行い実態把握に努める早期解決をめざしている。

●十月十九日に開催したPTA人権教育講演会では、沢田の杖塾主宰森口章先生をお招きし「思春期の子どもの付き合いかた」と題した講演を拝聴した。子どもが前向きになれるような声かけを一緒に考えることで思春期の子どものコミュニケーションに不安や戸惑いを感じている保護者の方々に不安を少しでも解消してもらおうなど、今日から生かせる事例を交えた講演であった。保護者のアンケートには、「子どもの顔を見て体調確認や今の状況を見極めるようにしていきたい」「子どもを、分かって、理解しようと思った」などがあった。

●十一月二十九日から十二月四日までを校内人権週間とし「学級人権宣言の作成」「委員会での取組」「人権に関する授業」を実施した。

小ざくら第二保育園

人権感覚の土台

「自分を大切に思う心」

「自分が好き」

「違いを認める心」

「友だちが好き」

という気持ちを育む

小ざくら第二保育園は午前七時から夜中の二時まで開園している保育園です。子どもたちが自分の家庭と同じようにホッと、安心して過ごせることを基本に、0〜1歳児はゆるやかな育児担当制をとり、子ども一人ひとりと深くかわりながら愛着関係を形成し、「自分を大切に思う心」「自分のことが好き」の基盤づくりに努めています。2〜5歳児は年齢の異なる子どもたちが同じクラスで生活や遊びをともにする異年齢児保育を行っており、子どもたちは「大勢の兄弟姉妹」のように過ごしています。そうした年齢や発達の異なる友だちとのかわりの中で、異質性や多様性を受容しながら「違いを認める心」「友だちのことが好き」という気持ちが育つべくように配慮しています。

